

今回の「やきもの勉強会」では、陶磁器の発展の歴史ではなく、人々が皿をどのように使ってきたのかを視点にしました。人はいつ頃から皿を使うようになったのでしょうか。「盛る」という食事の文化が現れたのがいつ頃のことなのかは、実はよくわかっていません。

中国では元から明時代初頭にかけて直径が30センチから60センチにも及ぶ大皿が作られ、特に大型のものは中近東の国々へ盛んに輸出されました。日本でも、江戸時代には大皿が使われるようになり、各地の窯で焼かれています。一方で小さな皿は、限りなく小さなものから、10センチくらいの寸法まで様々な大きさがみられます。特に日本では、花鳥風月を写して花や鳥の形、富士山の形、木瓜形、松皮菱形など様々な形の皿がつくられました。このバリエーションの豊富さは、他の国では見られない特徴でもあります。日本では、食事の際めいめいに小型の膳を用いたので、このような小さな皿が好まれたのでしよう。

食事のとき、膳のうえに並んだ小さな皿の愛らしい形は、眼福であったことでしょう。華やかな大皿を囲むときは、料理が進むにつれ皿の模様が表れてくるのも宴に花を添えたに違いありません。中国や日本の大皿と小皿が紡いできた食卓の物語を、人々の営みに思いをはせてお楽しみください。



企画展

やきもの

勉強会

食を彩った大皿と小皿

Introduction to Ceramics:
Dishes and Plates, Large and Small

根津美術館
NEZUMUSEUM



2017年 7月13日(木)～9月3日(日)

【休館日】毎週月曜日、但し7月17日(月、祝)は開館し、翌18日(火)休館

鮎の塩焼きを山盛りにして。

そめつけじゅもんおおさら
染付寿字文大皿

肥前 施釉磁器

日本・江戸時代 17世紀

根津美術館蔵 山本正之氏寄贈

高台が小さく、口縁に向かって大きく開いた皿は、17世紀初頭の肥前地方で流行していました。唐津や武雄でも同様の大皿が焼かれ、遠く青森あたりまで運ばれていたことが知られています。魚の塩焼きを山盛りにしたのでしょうか。



お
秋風の音が聞こえてきます。



いろえびねがたさら
色絵琵琶形皿

南紀高松 施釉陶器

日本・江戸時代 19世紀

根津美術館蔵

うず
和歌山市宇須に文政7年(1824)に開窯され、天保4年(1832)頃まで稼働した高松窯で焼かれたもの。琵琶の形をした皿は、薄く丁寧に作られています。

小皿の蝶々に菜花がお似合いです。



そめつけしょうもんこざら

染付蝶文小皿

景德鎮窯系 施釉磁器

中国・明時代 17世紀

根津美術館蔵

蝶を大きく、その上に虫を一匹小さく描いた皿は、縁を鏝状に平らに作るころなど、日本からの注文品の可能性を示しています。

一枚でも五枚でも、
使い方は自由自在。

あかえごかくこざら
赤絵五角小皿

漳州窯系 施釉磁器

中国・明時代 17世紀

根津美術館蔵

五角形の皿は、一枚でも使えますが、繋げて丸くして箱に納めて使う場合もあります。朝鮮半島でも宮廷の食卓で使っていたようです。



皆で楽しむ緑釉の大皿。

おりべおおさら
織部大皿

瀬戸 施釉陶器

日本・江戸時代 19世紀

根津美術館蔵

織部特有の緑釉が三方に掛けられ、鉄絵で花文が散らされている大皿です。このように釉を流しかけた皿は、同じころに九州の武雄窯でも盛んに作られていました。



同時開催

展示室5 まいほん 舞の本絵巻

室町時代から江戸時代はじめにかけて流行した幸若舞^{こうわかまい}という芸能の台本を読み物に転用した「舞の本」。それに絵を添えた絵巻をご紹介します。



つきしま
築島 1巻 紙本着色
日本・室町時代 16世紀
根津美術館蔵

港の建設が難航する平清盛が人柱を立てることを命じたのに始まる親子夫婦の恩愛の物語を、稚拙美にあふれた絵で描きだす。



たかだち
高館 2巻 紙本着色
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

ころもがわ
衣川の戦い前夜の義経主従の別れの宴と、合戦での弁慶らの奮闘を描く。忠義や殉死というテーマから、武将にも人気の曲だった。

展示室6 せいか 盛夏の茶

真夏の茶事は、日中の酷暑を避け、早朝や夕方に開かれます。涼を呼ぶ、季節の茶道具約20件の取り合わせをお楽しみください。



かにふたおき
蟹蓋置 道斎作
1個 青銅 日本・江戸時代 18世紀
根津美術館蔵

蟹は茶の湯で代表的な七種の蓋置のひとつ。写実的なこの作品は、名物を、姫路藩主酒井宗雅が天明7年(1787)に足利家伝来の名物を写させたもの。



れいひんみしまちやわん
礼賓三島茶碗
1口 高麗茶碗 朝鮮・朝鮮時代 16世紀
根津美術館蔵

見込みに書かれた「礼賓」は、朝鮮半島で外国からの賓客をもてなす官庁の礼賓寺のこと。そこで使用するための器を平茶碗として転用した。

関連プログラム

- 講演会 「江戸の料理屋とおもてなし」(仮題)
日時 8月5日(土) 午後2時～3時30分
講師 神崎 宣武氏
(民族学者・旅の文化研究所所長)
会場 根津美術館 講堂
定員 130名
- (申し込み方法) 当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、または往復はがき(1参加者につき1枚)に参加を希望される講演会名・住所・氏名(返信面にも)・電話番号を明記の上、〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1 根津美術館講演会係宛にお送りください。
※ 先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。
- スライド
レクチャー 日時 7月21日(金)、8月18日(金)
講師 西田 宏子(根津美術館 顧問)
会場 根津美術館 講堂
定員 いずれも130名
- ・担当学芸員より全体の見どころを、それぞれのテーマで解説いたします。
 - ・各回とも午後1時30分より45分間程度。開始の15分前より開場。
- 特別催事 「茶杓をけずってみよう」
日時 8月19日(土)
午前10時30分～/午後2時～
講師 池田 泰輔氏(竹芸家・竹楽会講師)
会場 根津美術館 講堂
- ※ 事前申込制。詳細は当館ホームページまたはお電話でお問い合わせください。

開催概要

- 展覧会名 企画展「やきもの勉強会 ―食を彩った大皿と小皿―」
- 主催 根津美術館
- 開催期間 2017年7月13日(木)～9月3日(日)
- 開館時間 午前10時～午後5時 [入館は午後4時30分まで]
- 休館日 毎週月曜日、但し7/17(月・祝)は開館し、7/18(火)は休館
- 入館料 一般1100円(900円) 学生800円(600円)
()内は20名以上の団体料金、中学生以下無料
- 前売券 一般900円 学生600円
※ 2017年5月25日(木)～7月2日(日)「はじめての古美術鑑賞」展開催期間中、根津美術館ミュージアムショップにて販売
- アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道) 駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベータまたはエスカレーター)より徒歩10分
- 住所 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
- お問合せ TEL 03-3400-2536 (代表)
<http://www.nezu-muse.or.jp>

次回展



企画展

ほとけを支える

―蓮華・霊獣・天部・邪鬼―

2017年 9月14日(木)～10月22日(日)

蓮華に坐す如来から、邪鬼を踏みつけて立つ明王まで、ほとけを支えるものの表現と意味を考えます。

重要文化財 金剛界八十一尊曼荼羅 日本・鎌倉時代 13世紀 根津美術館蔵